
神様ヘルプ！

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様ヘルプ！

【Nコード】

N4976A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

告白出来ない恋。したくてもできないもどかしさ。それをどうにもできない腹立たしさ。チェッカーズシリーズ第五弾です。初期のシングルの作品です。

神様ヘルプ！

「くそっ！」

アスファルトの道路を思いきり蹴りつけた。そうせずにいられなかった。ただただ今の状況が腹だたしかった。俺はとにかく今の状況がどうにもならないのが腹だたしかった。

上を見上げる。もう真夜中だ。そこには部屋の灯りがあった。だがそれは俺の部屋の灯りじゃない。あいつの部屋の灯りだ。

「また惚れたのかよ」

唾を吐いてからそう呟く。そしてまた上を見上げる。二人のシルエットだけが見える。そこにいるのはあいつとその新しい彼氏だ。俺じゃない。

見ているのが嫌になった。そのまま背中を向けてその場を去った。多分そのまま今夜は二人つきりといったところか。こんな夜をもう何度も送ったことか。だがそこにいるのは常に俺じゃない。あいつと他の男だ。

「妹みたいなもんさ、御前は」

格好つけてこう言ったのが運のツキだった。それで俺の本当の気持ちは胸の奥にしまっしかなかった。それからもう同じだ。俺はただあいつの友達でしかなかった。

今まで何度ふられたか。渋い奴だの派手な奴だの格好いい奴だのにいつも惚れる。そしていつも捨てられる。惚れっぽいうえに純情ですぐに騙される。その度にいつも相談に乗って慰めるのが俺だ。いつも俺はそんな仕事かしねえ。あいつにとって俺はそうした存在でしかない。他の何だというんだ。

「御免ね、いつも相談に乗ってくれて」

「いいよ」

場所は喫茶店だったり海岸だったり。だがいつも話す内容は同じ

だ。そして最後に俺が言う言葉も同じだ。何も変わりはいしねえ、本当に同じだ。

「また何かあったら話してくれよ。俺でよかったらな」
「うん」

そして涙を拭いてさよならだ。それから暫くしてまた新しい男に惚れる。時には俺が仲介したこともある。しかし結果はいつも同じだ。どうしてもいつも同じ結果になるのか不思議な位だ。そして俺がまた相談に乗る。何時までもそうしたこと繰り返しであった。そして今度もそうだろう。

ふとここで立ち止まった。後ろを振り返る。まだあの部屋は見えている筈だ。そして見えた。
「ケツ」

悪態をつかずにいられない。影が二つに重なった。何をするのかわからない筈もない。俺は足を早くしてその場を去った。そしてビルの陰に隠れた。これもいつもと同じだ。

「何をやってるんだ、俺は」
自分で自分が嫌になる。どうしてあの時言わなかったのか。一言で言えば俺が馬鹿だった。そしてその馬鹿さ加減が嫌になる。自身も嫌になるのだ。

自分のアパートに帰る。何の変わりもねえ只のボロアパートだ。来るのは野郎ばかりだ。女なんて来る筈もねえ。掃除もしねえこちら放題の部屋に俺は入った。

部屋に帰っても気が晴れる筈もなかった。飲もうかと思ったが止めた。それで気分が晴れるとは思えなかったからだ。俺は立った。そして部屋を出た。

「どうするか」
立ったところで何をしようかと考えた。とりあえず立っただけなので考えもなかった。少し考えてとりあえずバイクに乗って夜の街を飛ばすことにした。たまにはそれもいいだろうと思った。
「じゃあ行くか」

そのまま駐車場に向かう。そしてバイクのエンジンを入れた。コソコソと働いて貯めて買ったバイクだ。アメリカのものでかなり高かった。しかしそれだけの価値はある。ツレの間では人気がある。だがこれに女を乗せたことはない。乗せるのは一人だけと決めてある。乗せるあてもないが。

「何処にでも行くか」

そのまま出た。そして俺は夜の街に出た。それからあてもなく走り続けた。ただ走った。それしかなかった。今のこの荒んだ気持ちを抑える為にはそうするしかなかった。

部屋に帰った時にはもう朝になっていた。俺は朝日の中部屋に戻ってきた。見れば部屋の扉の前に誰かがうずくまっていた。

「どうしたんだ」

あいつだった。何かうつむいている。それだけで何があったかわかった。

「うん、ちょっとね」

顔を上げた。目が赤い。俺はそれを見ないふりをした。そして歩み寄った。

「海岸にでも行くか。ここじゃ何だ」

「うん」

立ち上がらせた。そしてアパートを後にする。

「朝から泣くことはねえよ。まあ何だ。ゆっくり話そう」

「有難う。いつも御免ね」

「かまわねえよ」

俺はこいつを連れていつもの海岸に向かった。いつものことだ。何も言わない。海岸で話を聞くだけだ。

顔を上げた。太陽が少しずつ昇ってきている。俺はそれを見ながら思った。

（こんなのもありかな）

海岸が見えてきた。それから俺はこいつの話を聞いた。いつものことだ。そしてこれから。けれどこれでいい。そういうのもいい

だろうと思いはじめた。

神様ヘルプ！

完

2
0
0
5
・
3
・
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4976a/>

神様ヘルプ！

2010年10月14日20時03分発行